Vene Investment

Venezuela Weekly Report

No.４０３　２０２５年４月２３日（水曜）

（写真）Shutterstock　“カラカスの貧困街（バリオ）の家屋群”

カラカス貧困街報告

大衆居住地区の建設物と文化の視察

株式会社ベネインベストメント
松浦　健太郎

今年２月にマドゥロ大統領はある日本人と会合を行っている。その人物の名前は山本 理顕（やまもと　りけん）氏。「日本建築家協会（JIA）」の会長を務めている人物で、２００１年に日本芸術院賞、０２年に日本建築学会賞、２４年にプリツカー賞などを受賞している世界的に有名な建築家である。

理顕氏は何のためにベネズエラを訪問し、どのような目的でマドゥロ大統領と会合を行ったのか。

本稿では、理顕氏によるベネズエラ訪問報告会で聞いた内容について紹介したい。

山本理顕氏は、横須賀美術館、広島市西消防署、福生市庁舎、埼玉県立大学、公立はこだて未来大学、名古屋造形大学、天津図書館（中国）、ザ・サークル・チューリッヒ国際空港（スイス）、パンギョ・ハウジング（韓国）の設計に携わった世界的に有名な建築家である。

２０２４年に理顕氏が受賞したプリツカー賞の審査委員長を務めたアレハンドロ・アラヴェナ氏は、理顕氏の作品について「パブリックとプライベートの空間の境界を巧みにぼかすことで、コミュニティの活性化に貢献している」と評価している。

この評価の通り、理顕氏の作品は地域コミュニティを重視していると言われている。

理顕氏は、地域コミュニティを学ぶために世界各地の集落を研究しており、現代の日本社会で一般的な「１住宅＝１家族（１つの住宅に１つの家族が住む)」という枠組みに替わる、地域コミュニティを前提とした新しい暮らし方のモデル「地域社会圏」を提唱するなど、建築設計を通じて社会のあり方を問い続ける建築家としても知られている。

そのような思想を持つ理顕氏がベネズエラを訪れた理由は、ベネズエラの大衆居住地域「バリオ」を視察するためだった。

大衆居住地域というと柔らかい言葉になるが、噛み砕いて言えば貧困街である。

理顕氏は、バリオを訪問し、地域の建設物に加えて、地域に住む人々の生活スタイルや文化を学ぶためにベネズエラを訪問したという。

なお、理顕氏は表紙のようなカラカス・バリオの風景を見て「建築家として、実現したい街並みだった」とコメントしている。

地元コミュニティによる自治が成立

実際にバリオ（El Panal 地区 Santa Rosa）の中に入った写真が右の写真。

この写真について、「道路の下に下水が通っている」「下水施設も住宅のペイントも電線をつなぐのも全て地元住民が行っている」「他の国にも同様の地域はあるが、カラカスのバリオは他国と比べて清潔で自治が成り立っている」「斜面で排水が良いからか匂いもほとんどなかった」と説明している。

「細い通りの雰囲気はヴェネチアの旧市街地のような雰囲気があり、地域コミュニティの関係の近さを強く感じた」と説明していた。

（写真）山本 理顕氏撮影

また、特徴的だった点として、表札に住んでいる人の氏名ではなく職業が書かれている点を挙げた。

例えば、この表札には住んでいる人の名前ではなく「Aqui vive Musico（ここには音楽家が住んでいる）」と書かれている。

自身の出来ることを書くことで、自分がこのコミュニティ内でどのように貢献できるかをアピールしているということのようだ。

ロープウェーは市民の足であり観光ツール

次は、サン・アウグスティン地区の様子。

サン・アウグスティン地区のバリオは、山頂まで続いており、山頂の家までたどり着くのは労力が必要になる。

そのため、チャベス政権時に同地区にロープウェーを建設し、現在は山のふもとから山頂までのアクセスが容易になっている。

また、ロープウェーから見下ろすことを前提とした広告やアート作品などもあったという。

山頂は景色が良く観光的な魅力もあり、ロープウェーの降り口付近では観光客を対象としたビジネスも営まれているという。

（写真）山本 理顕氏撮影

また、同地域では下写真の通り観光客を対象にした歓迎のダンスなども行われているという。

ただし、ポジティブな面ばかりではない。
理顕氏は、同地域が抱える問題としてゴミ問題を挙げた。ゴミを投げ捨てる住民は多く、道路ではない山の斜面にはゴミが散見されたという。

（写真）山本 理顕氏撮影

他、インフラを整備すること、火事が度々起きるようなので防火対策を強化すること、住宅の耐久性を上げること、「これらを改善出来れば素晴らしいバリオにすることが可能」「この自然発生的な建設群は文化であり、京都のような魅力的な街並みになる潜在性がある」「バリオを世界的な観光地にすることも可能」との見解を示した。

世界的なバリオ研究所の建設を計画

そして、マドゥロ大統領と理顕氏が面談した目的は、ベネズエラにバリオ研究所を作るプロジェクトを進めるためだという。

理顕氏によると、「どの国にもバリオは存在するが構造的な問題は同じ」だという。今後、このバリオをどのように発展、成長させるかについて研究を行うための施設をカラカスに作る予定だという。

この研究はベネズエラだけではなく、世界の大衆都市の発展にとっても重要な試みであり、各国の研究者が集まるような施設にするという目標があるようだ。

マドゥロ大統領は、この提案に感銘を受けたようで、同プロジェクトを進めるよう指示。そのための予算もおりており、計画に着手するとしている。

研究所の活動通じてバリオの魅力向上を期待

筆者の認識では「バリオ」と言えば、恐怖と暴力と貧困の集合体という負のイメージが強い。恐らくそのようなイメージを持つ日本人は多いことだろう。

ただ、バリオに対して恐れがある一方で、その独特の文化や雰囲気に対して強い好奇心もある。

今はバリオで暮らす人々の生活スタイルを YouTube など動画で見ることが出来るようになった。

その動画を見て感じることは、バリオで住む人々の地域コミュニティの結束の強さである。バリオには、日本では考えられないほど強い地域のつながりが息づいている印象がある。

また、バリオの特徴的な街並み、山頂まで続く細い階段から見下ろす景色、プライベート空間と公共空間の仕切りがほとんどなく迷路のような無秩序な町の設計など、建築群も魅力的である。

理顕氏の説明にもある通り、治安が一時期よりも改善したせいか、バリオに対して魅力や好奇心を感じる人を対象とした観光業も増えているようで、最近では各バリオ・コミュニティで「バリオに宿泊するツアー」なども組まれている。

マイナスイメージの強い「バリオ」だが、バリオ研究所の活動により、バリオの魅力を高め、そのイメージをプラスに変えることで、地域を経済的に豊かにし、そこに住む人々の自尊心を高める。そのような試みが出来れば素晴らしいことだろう。

富士国際　ベネズエラツアー企画

余談にはなるが、観光に関する話が出たので以下で日本の旅行会社が企画したベネズエラツアーを紹介したい。

実施時期は２０２５年８月前半。当初は
（A コース）コーヒー・カカオ農園施設訪問ツアー
（B コース）ギアナ高地訪問ツアー
の２種類が選べる予定だったが、A コースは無くなり、ギアナ高地訪問ツアーに一本化されたようだ。

旅程の中には「Communa（コミューン）の１つである１月２３日地区を訪問」と書かれており、カラカス旧市街地を訪問する予定もあるようだ。

旅行代金など詳細は現時点では公表されていないが、同社が発行している「いい旅・いい仲間 77 号」の８ページ目に現時点での概要が掲載されているので関心の方はご確認されたい。

富士国際旅行社：いい旅・いい仲間（PDF）

以上